

2. 台付土器の評価

今回の出土土器から、縄文中期中葉に位置づけられる、出土例が稀有な台付土器の台部が2点抽出できた。以下は、台付土器という、「器形」に関わる検討を行うものである。

第16図は、県内の中期中葉の類例を、ごくダイジェスト的に集めてみた。

本遺跡は、1が裾部に一条の沈線を廻らせ、透し孔（おそらく円形）を有する足高気味の高台のもので、4は器面調整痕のみの素文で、低高台気味のものである。これらは、胎土・焼成などから検討すると、前者が勝坂系土器、後者は阿玉台式土器に比定される。

前者の類例は、2の松戸市通源寺貝塚・3の同市大橋馬乗場遺跡例に明らかのように、勝坂式ないし勝坂系土器に多くみられる。形のわかる例を見る限り、カップ形土器や小形の深鉢形土器などに足高気味の台部が付けられている。これらは、円形の透し孔を有するという属性もまた、共通するのである。

そして、その分布は、6の船橋市高根木戸遺跡例（勝坂式土器）を含めると、下総台地の西部に多いことがわかる。この地域は、阿玉台式土器文化圏の中では、組成に勝坂式土器の比率が高いのである。

後者の類例は、松戸市根之神台遺跡しか検索が間に合わなかったが、阿玉台式土器である。報告書の挿図では、誤植のため上下が逆で、台付土器と気づきにくいという憾みがあるが、土器の解説は「台付土器の台部」と明記している。本遺跡とも台の上が欠損しており、どの器形であったかはわからない。

第17図に明らかのように、台付土器の台部の形状は、少なくとも足高気味の高台と、低高台に大きく二分できるようである。そして、前者では円形の透し孔を有し、後者では調整痕のみの素文となる。

これらから、本遺跡出土例の第16図1・4は、曲がりなりにも、台付土器における台部の形状の二者を、ある程度は忠実に表現していたことになる。

3. 「台付の土器を作る」ということ

本遺跡の低高台気味の台付土器に関しては、勝坂式土器の影響で文化複合が起こり、阿玉台式土器を製作していた集団の中で、「台付の土器を作る」という風習が誕生したものと、現状では捉えておきたい。

それでは、台付土器は勝坂式土器を製作していた集団（関東南西部から甲信地域）の中で、果たして生み出された器種なのであろうか。この問題を少しく検討してみる。以下では、地域間の問題や伝播なども扱うが、土器そのものの型式学的な手続きや裏づけは、浅薄になっており、御寛恕を乞いたい。

第17図1～5は中期中葉の北陸（富山・石川）の台付土器を集めたものである。

該当地域における中期中葉の土器群は、上山田式・古府式土器で、小島俊彰氏の解説を引用すると、『端部で渦を巻く基隆線を中心にして半隆起線を引き回してつけた文様が主文様』を特徴とする。

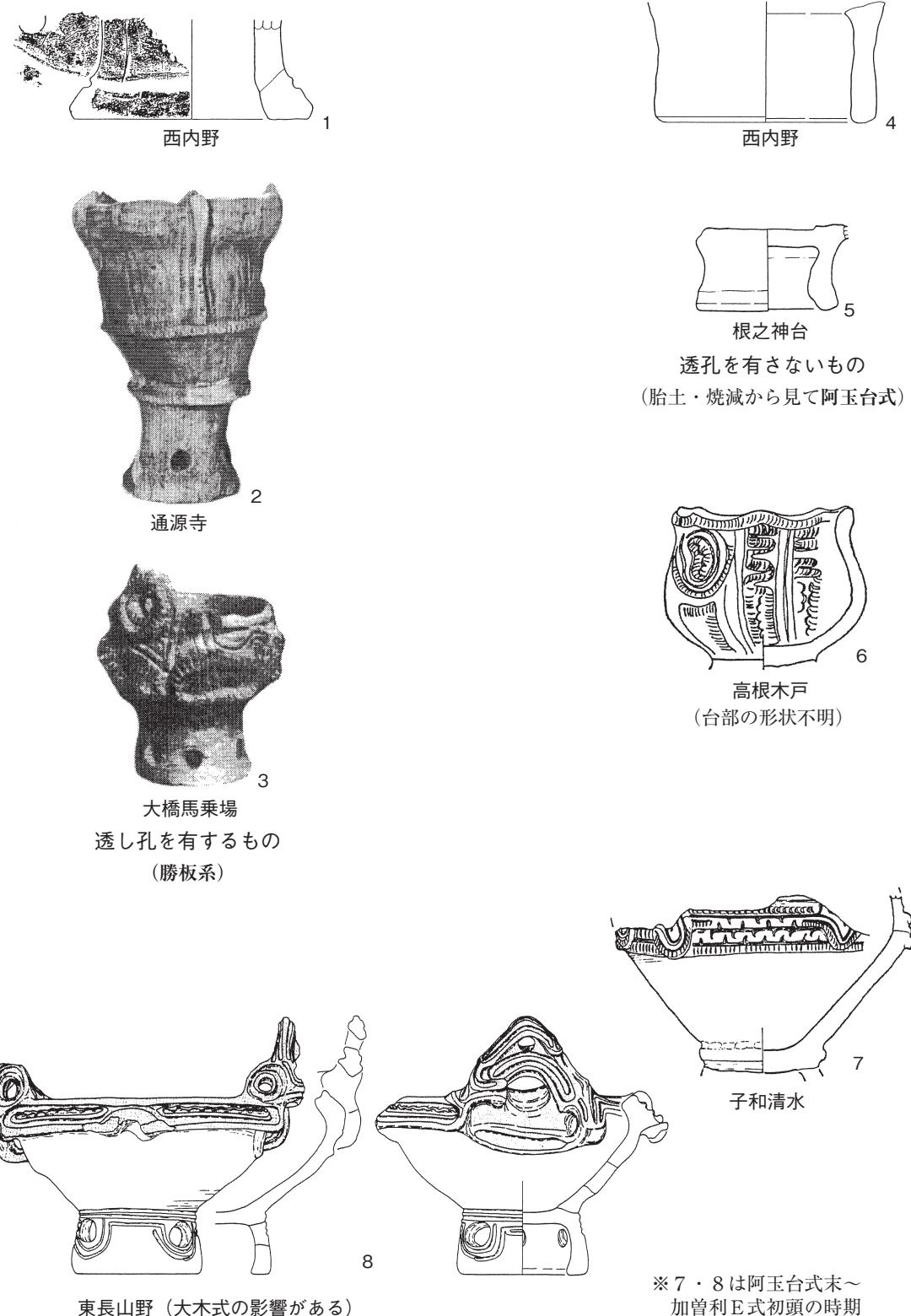
この地域では、図に載せなかったものを含め、台付土器は器種構成の中に安定して存在するのである。

しかも、台部の形状の二者が存在するだけでなく、時期的に複数の土器型式にまたがっており、ある程度の変遷を追うことができる。少なくとも、盛んに製作していた地域である、と言えそうである。

勝坂式土器と上山田式・古府式土器に見られる台付土器の発生が、「一元論」・「多元論」のいずれかを単純に判断することはできない。ただし、製作量の多寡や、台付土器の命ともいえる台部分の形状が、遠隔地同士の比較でも概ね同一である点などから見て、北陸起源の「一元論」的考え方は説得力がある。

反面、土器自体は、文様及びその描出法などがかなり異なっており、その点で器形の問題は難しい。結局、土器を媒体とする情報は、「文様」と「器形」では、伝わり方や変容の仕方が異なるわけである。

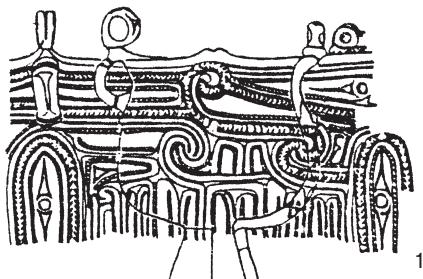
整理すると、北陸で生み出された「台付の土器を作る」という情報は、地域間交流を背景に、山越えで中部高地へもたらされ、勝坂式土器を製作していた集団に受容された。そして、関東山地を越え、さらに東京湾東岸の阿玉台式土器を製作していた集団へと、情報が伝わっていったものと解釈されよう。



(縮尺不同)

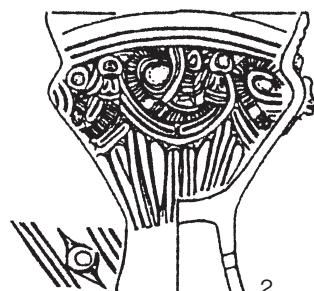
第16図 千葉県における縄文中期中葉の台付土器

足高気味の高台のもの



浦山寺蔵（富山）

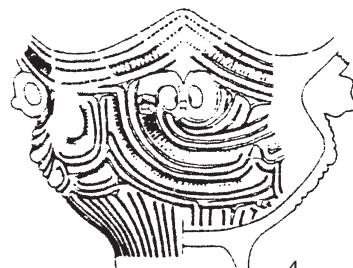
※ 1 → 2 → 3 で新しくなる
※ 4 → 5 で新しくなる
※ 2・4 は同段階、3・5 は概ね同段階
※ 1～3 のような器形を北陸の研究者は
「高台付鉢」と呼ぶ



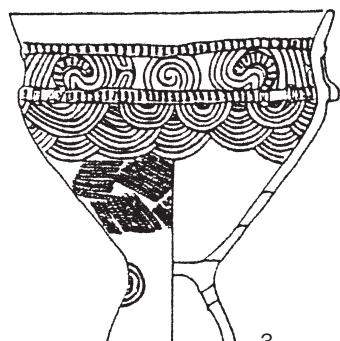
浦山寺蔵（富山）

1～5
北陸
(上山田・天神山系)

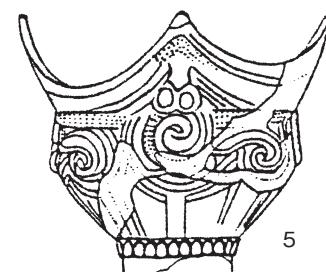
低高台のもの



筋生（石川）



ニツ塚（富山）



吉府（石川）

6・7
中部高地
(勝板系)



曾利（長野）



広原（長野）

(縮尺不同)

第17図 台付土器における二者（縮尺不同）

4. 派生する問題

台付土器に関して、派生する問題を幾つか取り上げたい。

第16図7・8は、時期的には阿玉台IV式～加曾利E I式期に相当し、「中峠式土器」を構成する主要な類型である「中峠0地点型深鉢」と併行するものである。本遺跡は、1が勝坂III式（あるいはIV式か）、2は阿玉台I b式～II式に比定されるため、それらよりはやや後出の資料となる。

8の把手を観察すると、大木8 a式土器の強い影響が認められる。この点も踏まえると、派生する問題として、大木系の土器に見られる台付土器の意味が挙げられ、細かく見れば、中期中葉～後葉にかけてという、時間差も検討の対象となろう。残念ながら、今回はこの問題に対する答えは用意できなかつた。ただ、大木8 a式土器の文様描出技法の中に少数認められる、「半隆起線」の系譜を辿ると、やはり北陸に行き着くので、台付土器の問題と無関係ではない可能性がある、とだけ記しておく。

5. その他の縄文式土器

まず、2点抽出できた田戸下層式土器は、市内でもいまだ出土数が少量なだけに、貴重である。

黒浜式・浮島式・興津式土器は、出土したとはいえ、比較的少量にとどまった。前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器は、ややまとまりがある。胴部片が多く、細別が困難なため、大枠で括っている。

五領ヶ台式土器は、いわゆる八辺式II期～IV期の資料で、出土数はIV期が多い。

阿玉台式土器は、今回の主体である。阿玉台I a式・I b式・II式・IV式が見られ、最も出土数が多いのはI b式で、胎土的には「雲母混入型」でも、雲母が比較的少量なのが本遺跡の特徴といえる。

1点ながら、大木8 a式土器（阿玉台IV式併行）が抽出できた。無論、本場の東北地方のものではなく、北関東（栃木県）ないしは、東関東（茨城県）地域で製作された土器と思われる。属性を検討すると、隆線による基幹文様に沿わせた結節沈線（有節沈線）などは、福島県南部の「七郎内第II群土器」との脈絡を示唆するものがある。今後市内での類例の増加を切望する。

安行1式土器は、精製・粗製土器とも出土しており、帶縄文系精製平縁深鉢の大破片が抽出でき、今回は晩期安行式土器の粗製土器も出土した。遺跡地名表を鵜呑みにはできないが、参考にすると、吉橋支台には後期安行式土器を出す遺跡が比較的多く、本遺跡の内容はそれを間接的に証明するものである。

参考文献（主として第16・17図の出典文献）

- 安孫子昭二 1990 「勝坂式土器様式」『縄文土器大観』2 講談社 317-324頁より
谷口康浩編 「勝坂式土器様式変遷模式図」
- 今村啓爾 1973 「土壙の分類」『霧が丘』霧が丘遺跡調査団 140-143頁
- 岩崎卓也ほか 1985 「子和清水貝塚 遺物図版編2」松戸市教育委員会
- 上守秀明ほか 1990 「根之神台・中内遺跡」『松戸市野見塚遺跡・前原I遺跡・根之神台遺跡・中内遺跡・中峠遺跡・新橋台I遺跡・串崎神殿東里所在野馬除土手』
財団法人千葉県文化財センター
- 小島俊彰 1990 「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観』3 講談社 295-298頁
- 下総考古学研究会 2004 『下総考古学18 特集 房総半島における勝坂式土器の研究』
- 松本 茂 1982 「七郎内C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』X 福島県教育委員会
- 道澤 明ほか 1990 『東長山野・北長山野遺跡』北長山野遺跡調査会
- 湯浅喜代治・ 1973 「千葉県通源寺貝塚採集の中期縄文土器」『考古学雑誌』59卷1号
- 塚田 光 日本考古学会 57-61頁